
【朝野光のなんちゃって企画・リレー小説】お題『絶望と笑い』

朝野光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【朝野光のなんちゃって企画・リレー小説】お題『絶望と笑い』

【Nコード】

N6770W

【作者名】

朝野光

【あらすじ】

僕の学校に転校生がやってきた。

彼女は持ち前の明るさで、すぐ学校に馴染んでしまう。
でも、なんだか僕は、彼女に違和感を感じるんだ……。

第一走目（綾川史也）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画第一弾はリレー小説！

お題をただ『絶望と笑い』とだけ決めて、あとは自由という、完全お遊び企画です。

唯一課される条件は、1人1000～5000文字、制限時間は1日、1人1周、だけ。

朝野のこんな自己満企画に賛同してくださった8人の猛者たちには感謝！

彼らによって繰り広げられちゃう奇想天外とんでもワールドと一緒に堪能しちゃいましょう！

第一走目は綾川史也さん。

スタートダッシュをキメてくれました！

第一走目（綾川史也）

彼女の笑みには嘘がある、そう気付くまでにはほんの僅かな時間しか掛からなかった。時間と呼ぶのも憚られるかもしれない。一見見れば分かる、とかそういう類のものだった。

僕はもちろん前島ゆかりという少女になんとも表しがたい興味を抱いたし、同時に、なんで彼女なのかな、という至極単純な疑問も浮かんだ。ゆかりと僕は似ているような気もするし、まるで別世界にいる人間のような気もする。そもそも、それを判断できるほど彼女と親しい訳でもなかった。……親しい人ではない、と、僕はそう思い込んでいた。

「前島ゆかりです。よろしくお願いします」

という彼女の声を聞いたのは、もうかれこれ二週間も前になる。ゆかりは僕らが高二に上がると同時に転校してきて、この二週間であつという間にこの学年に馴染んでしまった。もう彼女が転校生だというのを忘れかけている人もいるかもしれない。それくらい自然に、息をするように、彼女は僕らに溶け込んでいった。

だけど、と僕は思う。確かに、ゆかりの話す口調、うなずき加減、笑った時の表情、そういったものにはどこにも不自然なところがない。むしろお手本のような仕草だった。

でも、彼女はまるで自分の影をまき散らして、誰にも見えないところからその影を操って人と対面させているような——そんな奇妙な例えを思い起こさせる人なのだ。僕自身もどうしてこういう比喻が思いつくのか、うまく説明できない。

あるいは、逃げ水みたいな人、と言った方がもっと分かりやすいかもしれない。すぐ近くに見えるのに、こちらが近づくとずっと遠くへ離れていってしまう。そんな印象を受けた。あくまで印象の問

題であつて、実際の彼女はとも話しかけやすそうに見えるのだけれど……。

ゆかりは本当に色々な人と、楽しそうによく喋る。彼女が笑うのに合わせて、肩くらいまでの髪が綺麗に波打つ。少し抑え気味の笑い声が可愛らしく響く。それが今は日常の光景になっていた。

ただ、僕は彼女を見ていると、特に彼女の瞳を見ていると、不思議と寂しさを感じた。ゆかり自身がどう思っているのかは分からないけれど、何度見てもその思いは消えることがなかった。むしろ次々と塗り重ねられている気もしてくる。

都会の人ごみにまぎれている時に、突如として孤独感を覚える――なんだか、そういう感覚に似ている。でも、どうしてそんな印象が浮かんでくるんだろう？

その疑問が少しずつ氷解していくきっかけは、ある日、彼女がこんな風に話しかけてきたことだった。

「ねえ、藤宮くん」

ちょうど五限目の漢文の予習を仕上げていた僕は、その声が自分に向けられたものだと思付くのによや時間がかった。はっとして恐る恐る顔を上げると、そこにはゆかりの整った顔立ちがあつた。

彼女は僕の顔を覗き込む格好になり、拗ねたような表情を浮かべて続ける。

「そりゃまあね、異性同士だし話しかけづらいのも分かるけどさ」

何で急にそんなことを？ と首を傾げる僕に、ゆかりはこんなことを言い放った。

「久しぶりに会った知り合いにさ、二週間も無視つてのはひどくないかな？」

第一走目（綾川史也）（後書き）

第二走者は狭山葵さん。
お楽しみに！

第二走目（狭山葵）（前書き）

朝野光なんちゃって企画・リレー小説の第二走目！
作者は狭山葵さんです。

リレー小説らしいぶつとび展開に仕上げていただきました。
物語がだんだんと動いていく！？

第二走目（狭山葵）

何を言ってるんだ彼女は。

はて、昔会ったことなんてあつたかな、と思い出してみる。自分の記憶が確かならば幼なじみは一人だけだったし、小学校・中学校と仲の良い友人が転校して行ったなんて事はなかったように思う。親戚筋かな、といういろ巡らせてみるも、前島なんて名字にもゆかりなんて名前にも心当たりは欠片もないし、そもそも当時の面影すら思い浮かばないのだ。

前島さんに悪いけど、僕は覚えていない。

少しは覚えてるフリをした方がいいかもしれないけれど、正直に謝った方がいいだろう。

「えっと……」

言葉に詰まりながらも、覚えてない事を伝えることにした。

そもそも、僕は本当にこの前島ゆかりさんに会った事あるんだろうか。ひょっとしてこれはアレか、「ずっとあなたの事を見てました！ 好きです！ あなたも私が大好きなはずです！」的ストーリー成分でんこもりパターンなんじゃないか。それとも「私たちは前世で愛し合う仲だったのです。だから好きです」的知ったこっちゃねえ前世の記憶少女パターンなんじゃないか。いや、もしかしたら「あなたには私を愛さないと3秒で死ぬ呪いを掛けました。あなたに死んでほしくないの私を好きになってください」的魔法少女パターンなんじゃないか。

この3パターンのどれだろうな……。

いやいやあり得ないだろ……常識的に考えて。

頭の中に沸いたしょうもない妄想を水洗トイレのごとく洗い流し「僕、前島さんのこと覚えてないんです」と言い掛けたところで、ゆかりが早口でまくし立ててきた。

「あなたの事が大好きすぎて他の女に渡したくなかったので、私しか愛せなくなる呪いを掛けました。ちなみに、前世でも同じ呪いを掛けたんですが3秒で死んじゃったんですよねー。ホントに残念です。てへ」

なるほど全部だ。

あはは、と朗らかに笑う彼女を見て僕の口からは言葉が出ない。

「前世では3秒で死ぬ呪いだったんですけど、よくよく考えてみれば3秒で人を好きになるのって難しいですよねー？　そこで私は考えたのです！」

えっへん！　と少し威張ってレスポンスを待っている少女・ゆかり。

しばらく黙っていると、片目を開いてちらちらをアイコンタクトを送ってくる。聞き返して欲しいって事だろうか。仕方ないので聞き直してみる事にする。

「へー」

「へーじゃないですよ！　3秒ルールなら今ごろ藤宮くん死んでますよ！」

「3秒ルールって……」

「あ、ちなみに前世の藤宮くんはラスト1秒で「愛してる」って言ったんですが、心からの言葉じゃなかったので死んじやいました」

どうやら、彼女曰くの呪いの効果を3秒から一週間に延長したらしい。一週間以内に前島ゆかりに恋をすれば僕は助かるという事らしい。

「んなバカな」

第二走目（狭山葵）（後書き）

第三走者はサクシャさんです。
乞うご期待！

第三走目（サクシャ）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！！

第三走目はサクシャさんです。

とんでも設定からの主人公の心の動きと周囲の反応、少しずつ絶望の色が見えてきたり！？

これからまだまだドキドキ！

第三走目（サクシャ）

気怠い授業の余韻をまといつつ、たわいない話で休憩時間は流れていく。誰かがからかい、誰かが返し、皆声を上げて笑う。ゆかりも微笑む。

僕もまた、あわせて笑いながらも、意識は彼女の目の奥にちらつく影のようなものばかりを追っていた。

突然「呪い」を持ち出した前島ゆかりは、詳しいところは何も語らずで、それでも僕はその呪いとやらを解く条件をのんだ。

単純に、可愛い女の子からのアプローチを無碍にはできなかった、だけではない。いくらなりかたちが麗しくとも、狂気を内に抱えている子はちよつと遠慮したいものだ。けれど、自称“知り合い”による呪い宣言は、狂った感情の押しつけというよりはむしろ問いかけに近かった。病んでいるような激しい言葉の裏にいる彼女は、ぽっかりと空いたうろで、がらんどうで、人当たりの良い表面とは裏腹に表情の抜け落ちた顔をしている。それなのに、何も無い、そして何物をも寄せないところから、「わたしを愛せるか」と何の感情も宿らない瞳でこちらを見つめてくる。

呪いの真偽も面識の有る無しも関係なく、僕はその奇妙な、寂寥とした空間にどうしようもないくらいに惹かれた。

そして、一週間の時間を彼女に使おうと決めたのだった。

「ずっと、前島ばかり見てるよな」

好きも嫌いも、一緒に過ごさないことには相手に何の感情ももてない。まずはできるだけ長くゆかりと時間を共有してみようとする僕は、告白（呪言）から後、彼女を目で追い後を追い、たった三日後の今日にして、傍目には立派なストーカーになっていた。

「まあね、可愛いから」

「やっぱり好きなんだろ」

「来週にはね」

かみ合わない答えに首を傾げる同級生。

近くで友達と談笑していたゆかりがくるりとこちらに向きなおる。

「わたしは大好きだよ」

形のいい唇がからかうように言う。

口調に反してその言葉が本気であることを、今や学年中が知っていた。

昨日も同じように周囲に絡まれて、そのときは軽く「そんなことないよ」とか「偶然だよ偶然」とか答えていたところに、彼女は悠然と現れて「わたしは藤宮くんのこと大好き。本気だよ」とまさに完全な愛の告白をした。あまりに堂々と真面目に言い切られたので誰も彼女の言葉を疑わず、矛先を向けられて僕は包囲され、取り調べかのように、お前も好きなんだろうそうなんだろうさあ吐けすぐ吐け、と詰問責めにあつた。結局、嫌いでも好きでもないまだよくわからない、という非常に無責任な答えでしぶしながらも納得してもらった。正直なところ現状それが真実なので、これ以上を求められても何も出ない。

こういう情報は千里を走るので、僕とゆかりの微妙な関係は一日で周知の事実になった。

「前島さん、今日一緒に帰れる？」

「ゆかりでいいって言ったじゃない。いいよ」

我ながら付き合っているとしか思えない発言だ。若干恥ずかしさを感じてゆかりを見ると、こちらを見返していた。

他の人よりちょっと薄い色の瞳が僅かに揺れる。

三日彼女を見続けてわかったことがある。

この瞳の奥にある空ろは、僕が近づこうとすると引いてしまう。

第三走目（サクシャ）（後書き）

第4走目は音珠たかのさんです。
お楽しみに！

第四走目（音珠たかの）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！

第四走目は音珠たかのさんです。

彼女との距離が縮まっていく……そんな気がしたんだ。

まさに急展開！！

お楽しみください。

第四走目（音珠たかの）

僕は彼女と学校からの帰り道を歩きながら、とあることを脳内で考え込んでいた。

無論、彼女の瞳についてだ。

どうしてその瞳の奥の虚ろは、僕が近づこうとすると引いてしまふのだろうか。脳内会議の議題としてかけてみるものの、めぼしい理由は浮かんでこなかった。本当に大好きで、思わず呪いをかけてしまふ位なのに、それは引いていつてしまふ。どうにもその訳が僕には分からなかった。

かといってあまり思案ばかりしていると、彼女に不審がられてしまふから僕は当たり障りのない会話で様子を見てみることにした。

「ゆかり、さん」

「ゆかりでいいって。それだと苗字で呼ばれるよりよそよそしく感じちゃうよ」

「分かった。じゃあ、ゆかり」

「はい。なあと、藤宮くん？」

嬉しそうに微笑む彼女。吸い込まれそうなほどに可憐な彼女の笑みは男達をいとも簡単に魅了するほどの威力を持っているけど、ここ三日間のストーカー紛いの行為が功を奏したのか、僕は少し恥ずかしく思う程度で済んでいた。

「えっとさ、今日の帰りどこか寄っていいこうか。明日は学校が休みだから時間があるしね」

「それって、デートのお誘いってことかな？　だとしたら、私嬉しいなあ」

「まあ、そうやって捉えてもらっても構わないよ」

「やった！　藤宮くんとデートだ！」

わあい、と無邪気に両手を上げて嬉の感情を表現したゆかりは、続けてこう言った。

「私、紅茶が飲みたいなあ。そこでゆつくりお話がしたいんだけどいいかな、藤宮くん？」

「ゆかりがそれでいいなら、僕はそれに賛成するよ。あ、そうだ。お店は僕で決めていいかな？ 行きつけのお店があるんだけど、そのコーヒーと紅茶とケーキが美味しいって評判でさ。たぶんゆかりも気に入ると思うんだ」

「へえ、藤宮くんって意外とオシャレな一面もあるんだね。私、びつくりだ」

「びつくりって、僕の評価ってそんなに低かったのか……」

「いやいやいや！？ 違うよ、違う違う！ 藤宮くんがまさかそういうお店を勧めてくれるとは思わなくてね。ほら、えっと、こういうのって斜め上の解答っていうんだっけ。とにかくそういうこと！」

「そこまで慌てなくてもいいのに。冗談だよ、冗談」

「え、じゃあ、落ち込んでいないの？」

「もちろん」

「もう！ 藤宮くんのほかあ。びつくりしたじゃない」

「あはは、ゆかりの反応が面白かったからついつい」

「面白いつて……」

「そのままの意味だよ。ああ、楽しかった」

「藤宮くんはいじわるでした。だけど、ちよっぴり嬉しいです。会話が楽しくなるし、笑いが絶えないから」

「それ、誰に言っているの？」

「ううん、なんでもないよ。なんでもない」

「ふうん、なるほど。冗談は通じるわけか。」

呪いがどうか一週間で死ぬとか、普通の女の子とは思えない発言をするものだからこういうのはどうだろうかと試してみたけれど、ごくごく一般的な返し方だった。自称『知り合い』というだけあって見事な会話の応酬。僕もちよつと楽しくなってしまうくらい、いい反応だったし。これが彼女の持つ力であり、転校生にも関わらずあつという間にクラスに馴染んでしまうというのも頷ける。

さて、そろそろ経過をまとめるとするか。

今の所分かるのは、彼女の僕に対する好意に関しては狂気じみている部分があるけれど、それ以外は普通の女の子。むしろその外見や身振り手振りからしたら彼女は美少女に入る部類であり、僕はその美少女にとっても好かれていっているということ。しかし、まだ瞳の虚ろの理由は分かっていない。これに関しては追々調べていくしかないだろう。

そして、相手の好きという気持ちが狂っている以上はこちらも慎重にならざるを得ないだろう。僕だって男だから、こんな美少女に好きだなんて言われれば諸手を上げて歓喜するけれど残念ながら彼女は心が病んでいる様な発言をしている。呪われて殺されるなんて、あまりに不本意すぎる死に方だ。

どちらにしろ、これから行くカフェで彼女について知らなければならぬだろう。もう少し踏み込むのはその時でも遅くない。

自分の中で一応の結論を付けると、僕は口を開いた。

「さっき言ったお店、ここだよ」

「え、もう着いたの？」

僕は到着したお気に入りのお店を指差す。

この街の中心地からほど近い所にある僕等の高校は、周辺に飲食店も多い。そのうちの一つ『カフェ・ウォルター』は学校帰りに勉強をしたり、ただ一休みするためだけに僕がよく寄っていたりするお店だった。ここなら話しやすい環境ではあるし、店内はそれなりに賑やかだから雰囲気としては悪くないだろう。

「さ、入ろう。話をするならここが一番いいしね」

「そうだね。どんなケーキが美味しいのかな。楽しみだなあ」

「だいたいどれも美味しいけど、一番のオススメはチョコレートケーキかな」

「じゃあ、それにする！ さ、早くいこつ！」

甘い物に目が無いのだろうか、僕を急かす彼女。その明るい表情はとても可愛らしかったけれど、やっぱり目の奥は笑っていないかつ

た。

店内は予想通り、席の八割方が埋まるくらいには賑わっていた。高校生や大学生が主な客層で、スーツ姿のサラリーマンもちらほらという。時刻は五時半前。カフェが一番混む時間帯だ。

僕とゆかりは、彼女の希望で、店の奥の方にあるソファ席に座っていた。それも隣同士で。ただ、彼女にとっては大好きな人と水入らずの時間を過ごしたいかというのが理由だろう。特に怪しい訳でもないし断って何かあっても嫌だから、彼女の提案に僕は快諾した。「んーっ、本当にこのチョコレートケーキは美味しいね！」

「表層にあるチョコレートはちよつとビターだけど、下にあるチョコレートクリームはチョコレートケーキらしくちゃんと甘い。だからバランスが取れている。そして何よりくどくない」

「そうそう！　すごく、的確な表現だよ。全くもってその通り。私、毎日通つてもいいくらいだもん」

「店長さんが飛び跳ねて喜びそうなコメントだね。あとで伝えておくよ」

「うんっ、これからも美味しいケーキを作ってくださいねって言うておいてね」

「あはは、了解。一字一句そのままの内容で話しておく」

彼女が微笑し僕も笑う。彼女がチョコレートケーキに舌鼓をしている間、僕は注文した温かいカフェラテを飲む。

ここまで特に異常はなかった。どこにでもいるような高校生のカップルが、他愛もない会話を繰り返しているだけ。周りに溶け込むような雰囲気だ。

それなのに僕の中にある違和感は解けてなかった。どうしても、彼女の振る舞いが気になるのだ。

別におかしな所はないのだ。肩を揺らして笑う姿やケーキに目を輝かせる姿、アッサムティーを飲む様子だってどこにも不審な装い

は見受けられない。とても普通の、可愛い女子高生。でも、僕の中ではどこか引かかっていた。

いつまでも、この喉に何かが詰まる感覚を放っておくのは気分が良くない。そろそろ核心をついた発言をしてもいいだろう。僕自身も彼女の言動と行為が気になっていたので。

「一つ、聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「なんでもいいよー。じゃんじゃん聞いちゃってくださいな」

「分かった、そうする」

胸がざわざわする。何かが、誰かが踏み込んでいけないと警告している気がしたけど僕は気にせず、口にした。

「ゆかりはどうして、僕を好きになったんだい？」

「え？」

「そのままの意味。ちょっと変わった告白をされて、しばらくの間気になっていたんだ。特にモテる要素もない僕を、どうして好きになったんだらうってさ」

彼女の表情が少し変わった。微弱な変わり方だが、ストーカー行為の賜物だろうか僕には感じ取ることができた。

「どうしてって……。前に話した通りだよ。あなたの事が好きだから、私しか愛せない呪いをかけた。前世では三秒で死ぬ呪いをかけたけどあなたは本気で愛してくれなかったから死んじゃった。だから現世では、一週間で死ぬ呪いにした。なぜなら、私はあなたの事が大好きだから」

改めて聞くと、凄まじい電波っぷりだなとつくづく思う。前世だの呪いだの中世や近世じゃ信じられたかもしれないけど、今は二十一世紀の文明社会だ。誰がそんな電波発言を信じるんだ。

そうは思うけれど、彼女を狂わせるわけにはいかないから僕は続けてこう言った。

「それは三日前に聞いた。なんというかわ変わった告白だなあと感じたけれど、人にはいろんな個性があるから、これも告白の仕方の一つなんだなって思ったよ。それより僕が気になるのは『知り合い』」

って所なんだ。僕は君と何処かで会った事があるのかな？」

「本当に、知らないの？」

「うん。その点では、君の期待には応えられない。でも君は、僕の事を大好きと言っているくらいだから僕はその好意を受け取りたいゆかり、僕は君の事をもっと知っておきたいんだ。そのために、お互いの情報の齟齬だつて解消したい」

僕は話しておきたかったことをあらかた言い放つ。彼女は驚きを隠せない表情をしていたがそれも予想の内だった。

いつもより喋り続けたから少し喉が渴いた。彼女が持ってきてくれた水でも飲んで喉を潤すか。

そう思い、僕はごくごくと勢いよく水を飲んだ。

しかし、この行為が大きな間違이었다。

「あ……れ……？」

なんの変哲もない飲料水を飲んだはずなのに、唐突に意識が遠のいていく。

おかしい。どうして。初めのうちはそういった疑問を浮かべることができた。でも、それもほんの数秒まで。次の瞬間には視界が揺らいでいき、彼女の顔もぼやけていた。

だが、薄らいでいく意識の中でもはつきりと捉えられた彼女の表情に僕は驚愕する。

彼女は笑っていたのだ。焦点の合わない眼でもはつきりと分かるくらいに。

だけれどもその笑みは、狂気に満ちた笑みだった。口角は上がっているのに、目はちつとも笑っていない。それどころかその眼球に光は宿っていなかった。

狂っている。狂ってやがる。そう、はつきりと分かる顔つきだった。

「奥深くまで知ろうとするから、ダメなんだよ？」

ぼそり、と耳元で彼女が呟く。

眠りの世界へ誘われる直前の僕は、力なく彼女の肩に寄り添って

いた。抵抗する力なんてどこにもない。ただただ、吸い込まれていくだけ。

僕が意識を失う直前、彼女はとても優しい声でこう言った。

「だあいすきだよ、藤宮くん。ふふふっ」

彼女の狂った笑み。落ちてゆく意識。

これが僕の、絶望の始まりだった。

第四走目（音珠たかの）（後書き）

第五走目は朝野光、僕です。
お楽しみに……？

第五走目（朝野光）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！

第五走目は僕、朝野光です。

自分で自分の文章を紹介するのは恥ずかしいですね。

そうですね、急展開に持って行ったつもりです！

楽しんでいただければ幸いです。

第五走目（朝野光）

目が覚めると僕は仰向けになって倒れていた。瞳を開いたその先には真つ白な天井が見えていて、体を起こし周りを眺めてみると、壁と思われる四方、そのどれもが同様に真つ白だった。これは凄く白いな。頭上が天井かどうか怪しくなってくる。ベッドが中央に置かれ、それだけだ。窓もない。白い電気だけがいやに眩しい。頭がおかしくなってくる。

白い空間。完全なる白亜に囲まれていた。八畳ぐらいの広さで、二オイはない。

いやあ、やばい。わけわかんない。だってまず、さ。僕はどうしてこんなところにいるんだ？ 昨日はいつも通りに起きていつも通り学校に向かつて。授業を受けて友達と話して授業を受けて、それから、それから……ゆかりを下校に誘ったんだ。

——トントン、トン

階段を降りてくる音が純白な空間に無機質に響く。

そうだ。僕は、前島ゆかりに眠らされたんだ。

「あら、起きてる。意外と早いんだね」

白い空間にとってつけたようなドアが開いた。その表情は笑顔そのもの。

「お前っ！ 僕に何をした！」 手を振り上げようとすると右手首に違和感を覚える。鎖だ。頑丈そうな鎖がベッドに繋がれている。なるほど、完全に拘束されてるのな。

「『お前』って、ひどいなあ。ゆかりって呼んでくれたじゃない。手、気をつけてね。ケガしたら嫌だよ。私がつける傷以外はいらないよ」

狂ってる。やっぱりこいつ、狂ってやがる。

「こんなことして、どうなると思ってんだ。このままじゃお前」

「このままじゃ藤宮くんが死んじゃうね」

「……っ!？」

呪いだ。僕が死んでしまう呪い。

何を言っても無駄かもしれないと思った。まずはこの状況を切り抜けなければ。

「どうすればいい」

ゆかりはドアを背にしたまま顔を伏せ答える。

「だから、後三日だよ。後三日で私を好きになればいいんだよ!」
顔は確かに笑っていたけど、僕はなぜかそれが少し寂しそうに見えた。

残り三日間ということは、どうやら僕は一日眠っていたらしい。ただで残念なことに、この白い空間は時間感覚がつかめない。本当に一日かどうか分からないのだ。

やることがないこの部屋でできることといえば、天井のシミ…
…も真っ白すぎてないから数えられないし、結局、僕はゆかりとしゃべる他なかった。

何だかんだ言ってゆかりと話すのは楽しい。僕は騙され眠らされこんな場所に繋がれているっていうのに、プラスな方向に感情は働いていた。そんな自分に嫌悪感を覚えたりもする。

「今何時？」

「教えな―い!」

残り二日となった今日(?)、ゆかりが運んでくれた朝食だか昼食だか夕食だかわからないご飯を食べ、僕らはとりとめもなく話をしていた。

「いや、時間わかんない日が続くとか、マジで狂いそうだよ」

「私への愛に？」

「状況への哀に」

「やったあ!」

「絶対わかってない……」

ベッドの頭の方にもたれながら、二人で並んで体操座りだ。こっちは風呂にも入らせてもらえないってのに、ゆかりからはいつもシヤンプーのいい香りがする。ドキっとしない、わけでもない。

「ていうか藤宮くん、朝ご飯の感想、いただいてないんですけど」
ゆかりは若干目をそらしながらそう言った。了解、今は朝なのか隠せてないぜ。

「ああ、おいしかったよ。牛乳が」

「牛乳って、私が作ったもんじゃないじゃん！」

「いやいや、よく冷やされていて、なおかつ新鮮な香り。濃厚な舌触りが素晴らしく、ごくんと、このノドを絞められると死んじやうううううううげえっ！！　おいしかった！　サバの照り焼きがおいしかううげえっ！」

呪いではなく物理で死んじやう！

自分が何をしてるか気づいたらしいゆかりは、手を離れたかと思うと、頬を赤らめ照れ笑いをした。おい、なぜ照れ笑いだ。

「もう、素直じゃないんだから。まあ、あ、あの牛乳は私の……母乳だったりして」

「ほわ——っ！？」

「う、うそだよー！」

「当たり前だあああああ！！！！」

こうやって一日を過ごしていった。呪いの期限が残り二日と迫った今、確かに僕はゆかりのことを好きになりかけている、気がする。やっぱりよくわからない。あいかわらずゆかりは狂ってるし、目の奥にうつるかげりも、部屋を出て行く時にははつきりと見えてしまふのだ。

「藤宮くんは、やっぱり私のこと好きになれない？」

その日の夜——ゆかりが夜ご飯と言ったから多分そう——ゆかりはそんなことを僕に聞いた。これはどうすればいい？　僕はとりあえず今思っていることを正直に伝えた。

「まだわからない。ゆかりと話してるのは確かに楽しいし、飽きも

しない。うん、楽しいよ。ただこうやって話すようになってまだ五日だ。そんな簡単に気持ちは固まらない……のかもしれない」と、我ながら曖昧な回答。

「そっか」

ゆかりの瞳に陰が落ちた。その瞬間を見逃しはしなかったが、僕に何ができるわけでもない。結局、僕は死んでいくのだろうか。仕方ない、のかな。あまり実感がわかない。

「ゆかりはどうなんだ？ 本当に僕のことを好きなのか？ 知り合いなのかも教えてくれないし、そもそも呪いって本当？ 僕は本当に死んじゃうの？ 本当のことが何一つわからないんだよ」

「私は藤宮くんが好きだよ。大好きだよ」

「本当かよ」

ゆかりの顔はみるみるうちに暗くなっていく。それはこちらの気分も一緒に引き連れくだっていく。

「しょうがないんだよね」

ゆかりはベッドから立ち上がり、そのままドアに歩いて行ってしまう。その瞬間、同時に僕を異常なまでの恐怖が襲いかかった。しようがない？

僕が……死ぬ？

ちよつと待て、まだ話は終わってない。僕の命が関わってるんだ。僕はまだ、こんなところで死にたくはない！

「ま、待ってくれ！ ゆかり、待ってくれよ！ 僕はまだ死にたくないんだ！ 教えてくれ！ 本当に僕は死ぬのか？ いや、好きだ！ ゆかりのことが好きだよ！ だから助けてくれ！ 好きならいいんだろ！？ ゆかりを好きになれば、僕は助かる、そうだったよな！？ 好きだ！ 好きだ……よ……？」

ゆかりは泣いていた。

その涙は僕の心臓を鷲掴みにした。嘘、なんだよな。嘘について

まで、僕はこんなに生きていたかったのか。僕はこんなにも、一人の闇が怖かったのか。

ゆかりは電気を消した。白い空間に、一切の色がなくなる。あるとするならば、深い、ただ深く濃い、黒。

「嘘つかなくてもいいんだよ」

僕の体はガタガタと小刻みに震えだした。やだ。やだやだやだやだ。やだやだやだやだやだやだ……死にたくない！

「じゃあね、藤宮くん。……ごめんね」

ドアが閉められた。

泣いた。叫んだ。死にたくなかった。僕の命は残り一日。人生が終わるんだ。僕は死ぬんだ。ひとしきり泣き叫び、疲れ果て泥のように眠りに落ちた。

目が覚めると、視線の先にはやっぱり白い天井が広がっていた。電気がついていて。いつつけてくれたんだろうか。目をこすろうと右手を上げた時、僕はここ二日そこにあつたものを確認できなかった。

鎖が外れている。

僕は自由になっていた。

起き上がった。ベッドを飛び降りる。

転んだ。久しぶりに歩くのだ。

また走った。白いドアめがけてがむしゃらに。

出られる！僕はここから出られるんだ！

ドアに手をかけた。それは、静かに開いた。

「こんなことをして何になる」

途端に僕は怖くなった。残り一日だけしか生きていられない僕が、今さら外に出てどうなると言っただ。怖くなった。部屋が出るのが、

怖くなった。ゆかり、ゆかりはどこにいる？

笑えてきてしまった。僕をこんな部屋に閉じ込め呪いをかけた張本人に、僕は今すがろうとしているのだ。情けない。でも必要なんだ。どうせなら、最後まで責任を持ってくれよ。僕の死を見届けてくれよ。

「ゆかりー、ゆかりー」

ぼそぼそと、つぶやきながら、ドアを開けきった。目の前にあるのは階段。ずっと上へと続いている。一段一段とのぼっていった。僕はどこへ向かっている？

「ゆかりー、いるんだろー？ ほら、出てこーい」

階段をのぼりきると、そこはどうやら家らしかった。そこまで広くない一軒家。でも、家具がほとんどない。奥の方から話し声が聞こえた。恐る恐る歩を進める。逃げてしまおうかとも思った。家から出てしまえば、自宅なり交番なりなんなり、行くあてはある。

でもなぜだか僕は、そうしなかった。声の主はテレビか。笑っていいともがやっている。今はお昼。そして今日は、

木曜日だった。

僕がゆかりから呪いのことを打ち明けられたのは水曜日。

もう、一週間は経ってしまったている。

僕は部屋中を探し回った。二階建てのこの家を行ったり来たり。家具らしきものも見当たらないし、生活の痕跡さえも見つからない。ここに一日でも誰かが住んでいたのか？

そう、わかってしまえば、簡単な話だった。こんなの、僕が死ぬより絶望的だったかもしれない。

「ゆかりー！！ いるんだろー！？ ゆかり！ 出てきてくれよ……出てきてくれよ」

返事はもちろんないんだ。

だって、僕はここにいるんだから。

一週間経って消えていたのは、僕ではなくゆかりの方だった。

第五走目（朝野光）（後書き）

第六走目はごくしょーさんです。
お楽しみに！

第六走目（こくしょー）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！

第六走目はこくしょーさんです！

明かされる衝撃の真実。繰り返される過去。

この物語はどこに向かうのか。

またも急展開！ リレー小説はこれがたまらない！？

お楽しみください。

第六走目（ごくしょー）

琥珀に輝く蜂蜜の中を、わたしの意識だけが漂っている。あれからどれくらいの時間が経ったのか。ほんの一日しか経っていないのかもしれない。あるいは数時間、数分、数秒、数瞬。それでもわたしにとっては、砂の詰まった砂時計の様に永久に停止した時の隙間に感じられる。

おそらくわたしは、前島ゆかりは死んだのだ。

どうしてこうなってしまったのか。今になって、ようやく原因を理解することができた。

わたしが彼を好きになれなかったからだ。

素直に心の裡を吐露すれば。わたしは藤宮に微塵の好意さえも持ち合わせていなかった。むしろその反対で、嫌悪すら抱いていた。名前を呼ぶことすら躊躇われる程の。

彼が言った通りで、藤宮に異性を惹きつける魅力なんて無かった。彼は本当につまらない人間なのだ。色々と考えているようでその実主体性がなく、周りに流され自分自身による意思決定を避ける。そのくせ自分が可愛いようで、その為なら平気で嘘を口にする。

「気持ち悪い」

彼に対する本心からの印象だ。

他の女に渡したくなかったのは本当。彼が他の女のところへ行くと困るから。

呪いをかけたのも確かだ。ただ、好きになって欲しかったからではない。

前世で同じ呪いをかけ、3秒で死んだのも嘘偽り無い真実に違いない。……ただし、この場合死んだのはわたしだ。

それもこれも全ては復讐のため。

ほんの半年ほど前。それまでわたしは至って普通の学生で、極々平凡な暮らしを送っていた。部活動にも参加していなかったし塾に

も通っていなかった。放課後は友人と遊ぶばかりで、特に意味もなく日常を浪費していて、なんてことないフラクタルの中心であり末端であった。

そんなある日、課題の資料を探しに図書館へ行く事になった。その日は適当な本を借りて、すぐに帰る予定でいた。けれど、不運にもそこで彼を見つけてしまった。

瞬間。何かに弾かれた様に脳を巡る血液が加速を始めたのを感じた。そしてその奔流に乗ってわたしの中を駆け抜けた遠い日の思い出。前世の記憶だ。

時代は分らないが、前島ゆかりになる前のわたしはある貴族の一人娘で、それはそれは優雅な暮らしをしていた。お茶を淹れ、琴を嗜み日に三つの詩をしたためる。今のわたしからは随分かけ離れた生活だ。ただ不思議なことに、名前は今と変わらず「ゆかり」だった。

そんな生活にも終わりがくる。東宮に求婚されてしまったのだ。わたしの一族は貴族の中でも身分の低い部類にあたり、彼の要求を拒否できる立場になかった。すぐさまわたしは都に呼ばれ彼の正室に入ることになる。

本来なら喜ばれるべき待遇なのだろうが、彼は身分と気位だけが高い無能者であった。老獪に利用されるだけの無力な傀儡。そしてこの東宮こそが藤宮の前世の姿だった。

こうなってしまうては人は無力だ。わたしは人生を捨て、従順な妃を演じることにした。心は明け渡さずとも、体は差し上げることにした。しかし彼はそれでも気に入らず、わたしの心までも欲しかった。分不相応な欲である。

正室に入り数ヶ月経った頃、呪い師を宮中に招いた彼はわたしに呪いをかけさせた。

それが「3秒以内に好きにならなければ死んでしまう呪い」である。

彼は得意気な笑みでわたしの顔を覗いた。おそらく、それでわた

しの心が手に入ると思ったのだろう。馬鹿な人である。恐怖で人を好きになれるはずがないのに。

感覚的には3秒も無かったと思う。彼を好きになるという途方もない不可能に対し、わたしは絶望の中で絶命し、そして記憶はそこで途切れた。記憶の流入もそこで終わる。

こうして話は現代に戻る。図書館では藤宮を一方的に見かけただけなので、藤宮はわたしのことなど知らずにいたのだろう。

けれどわたしはその時より彼に対してただならぬ憎悪を抱いてしまっていた。本能的に、彼が東宮の生まれ変わりであることが分かったからだ。

すぐに復讐を考じた。その時わたしは怨霊の力が、前世で受けた呪いをそのまま彼にかけることが出来る様になっていた。それ程までに、東宮が憎かったのだろう。遺恨、怨念、惆悵、怨嗟の力は凄まじい。

身につけている制服から通っている高校、名前、年齢を割り出した。ただそれだけではもちろん情報が足りない。

まず、彼がわたし同様に前世の記憶を持っているかどうかが気がりだった。彼がわたしと同じに記憶を持っていたら警戒されてしまつて復讐を遂げることは困難だった。

次に、呪いをかける条件が「笑顔を向けられること」であること。そのためには、彼と接触しなければならぬ。わたしは学校を変えることにした。その時のわたしにはいくらかリスクのある行動だったが、もう彼を殺せればどうでもよかった。

転校してすぐに彼に接触するのは危険に感じたので、様子を覗うことにした。結論としては、彼には前世の記憶がないということ。そして前世ほどではないが、やはり人として魅力ある人物ではないということが分かった。

新しい高校生活が始まり、二週間ほど経った頃によやくわたしは彼とコンタクトを持つことにした。そこでわたしは彼に告白をすることになる。

呪いをかけたのは、正確にはその翌日だ。最初は全然「笑顔」を見せてくれなかったのも、その時はただ驚かすだけで終わってしまった。

それから、殺すだけでは満足いかないだろうと思い、素直に呪いをかけずに手の内を明かした。彼にもわたしと同じ気持ちを味わってもらいたかった。絶望して欲しかった。もがき苦しみ、助けを乞いながら死んでくれれば、わたしはきっと以前までのわたしに戻るだろうと。

問題は、この呪いは自分も相手を好きでないと発動しないということだ。発動されない呪いはそのままわたしへ返ってくる。気付いたのは死んでしまってからで、手遅れもいいところだった。

それに気づかず、藤宮は生き長らえている。悔しくて仕方ない。結局、わたしは何のためにあの辛い記憶を受け継いだのか。

わたしと同様に前世と同じ名を持って生まれてきた彼。

「藤宮えにし」

憎いその名前を口に出す。そうするだけで、憎しみは更に募る。この次があるなら、きつと。

第六走目（こくしょー）（後書き）

第七走目は二階堂文士さんです。
お楽しみに！

第七走目（二階堂文士）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！

第七走目は二階堂文士さんです。

一つの事件が終わり、それは歴史となる。そして今、また新たな世界が始まる。

こんなことをずっと、あたしは繰り返していくのだろうか。
うつん、違った。今までとは違う答えが、そこにはあった。

……きゅんっ！ このリレー小説面白い！（自画自賛？）

お楽しみください！

第七走目（二階堂文士）

「きつと、どうするっていうんだい？」

突然の問いかけに驚きつつも声のする方に意識を向けると、そこには一人の美女と一匹の猫が甘ったるい琥珀の海を漂っていた。意識だけの存在であるわたしとは違い、ハッキリと自分の姿形を残して。人様の意識下だというのに、ずいぶんと居心地が良さそうである。そして、残念なことにもそのお気楽そうな連中をわたしは知っていた。

「あなたはあの時の呪い師……？」

そう、彼女は前世でわたしに呪いをかけた呪い師であった。前世で彼女に会ったことはほんの数回しかなかったが、前世の記憶から考えて間違いない。ただ、なぜ語尾にクエスチョンマークをつけたかというと、彼女が黒い三角帽子に黒いローブを羽織り、これまた黒い猫を肩にちょこんと乗せているので、呪い師というよりは魔法使いに近かったからである。

「呪い師、か。広義ではそう言ってもいいかもしれないな。実際、呪いをかけたことには変わりないのだし。ただ、印象は変わっただろ？」

「ええ、確かに」

「今風に近づいただろ」

「今風……？」

どこをどう間違えたらそのハロウィンさながらの服装が今風なのだろうか。いや、ハロウィンが日本に浸透してきたのはつい最近のことだから、今風と言っているのか？魔法使いなんていまだありふれたネタだし、全七部作の世界的魔法使いの物語の最終章パート2

が映画館で上映しているんだし。でも、そんなコテコテの格好……
っていうか、この人はどこを目指しているんだろう？

などと他愛もない疑問が駆け巡り、わたしが首をかしげていると、
やれやれといった感じで黒猫が口を開いた。

「これが世間の反応だよ。だから言っただじゃないか、いまどきの術
師はみんな華やかでかわいい格好をしてるんだって。ましてや、中
学から高校に通うような少女が大多数を占めてるんだから、絶対行
き遅れのおばさんなんて——」

「うっさい、私だって頑張ったんだ。白装束に葉っぱの髪飾りつけ
た、巫女通り越して『生ける卑弥呼』呼ばわりされたあの頃よりま
しだろ。だいたい、あんたが言っただ、今はアメリカが世界の権
力握ってるから、仏教よりキリスト教、呪い師よりも魔法使いだ、
って。だから魔法使いに鞍替えしたってーのに」

「だからってなんでそのオールドファッションを選んだんだよ」

「古いものを馬鹿にするなよ？よく言うだろ、温故知新って」

猫が人語をしゃべっているという事実には驚く暇もなく。美女、も
とい、いい年した女性が猫とじゃれあって口論している姿はとても
痛々しく。そもそも口論に出てくる言葉の意味や解釈を間違えてい
るような感じで、終着点がどこになるか定かでないエンドレスな内
容であり。我慢出来ずにわたしは二人の間に割って入った。

「そろそろ、なんであなたがここに来たのか話してもらいましょう
か」

低く。冷たく。にもかかわらずよく通る声でわたしが言い放つと、
彼女はそれまでの冗談めいた顔を止め——とはいえ笑ってはいたが

——真っ直ぐにこちらを見つめてきた。

「あんた、私のことが嫌いだよ」

「当然でしょう、呪いをかけた張本人なんだから」

「まあ、それはそうだけだよ。でも、命令したのは私ではなくて東
宮だ。今は藤宮だったっけか。くだらないことに力を使うことは不
本意だったけど、私にもそうせざるを得ない状況だったんだよ」

彼女はそう言って三角帽子を手のひらでクルクルと回し始め、一回姿を消したかと思うと、その帽子はシックな山高帽に変わっていた。わたしは何事もなかったかのように彼女の視線を追う。

「ただ、その呪いをまさかあんたが使えるようになるとはね。正直そこまでは考えられなかった。で、どういう因果か、前世のことを引きずって現世が結果を残したというわけだ。そして、これは来世まで続いてしまう。こんなこと、滅多にあることじゃない」

「何がいいたいんですか。さっさと結論に入ってください」

帽子の姿を消すたびに帽子の形を変え、話を進める彼女に嫌気がさして声を荒げると、彼女はピタリと帽子の形を変えるのをやめた。帽子は最初と同じ三角帽子に戻っている。

「これから来世を迎えるあんたに忠告をさせてもらう。今回の事態を招いたのに私は少なからず関与しているからね。せめてもの罪滅ぼしだ」

「……」

「詳しいことは長く難しくなるから言わない。いいかい、好きは好き、嫌いは嫌い、だ。そこに理由はあるかもしれないし、ないかもしれない。ただ、それをねじ曲げた時。それが運命と呼べるようなものに関わる場合、君の道は過酷なものになるかもしれない。肝に銘じておくことだ」

彼女はそう言って三角帽子を頭に戻すと、同時に、わたしの視界が揺らいできた。そろそろ来世に向かうということなのだろうか。

霞む意識の中、私は尋ねた。

「あなたは、あなたも前世から現世にきた存在なんですか。それとも、まさかわたしの前世の時からずっと生きながらえているんですか」

「尋ねたところで無意味なことだよ」

彼女は即答し。

わたしの意識は消え。

琥珀に輝く世界だけが、その場に残された。

わたしは再び、地上に戻ってきた。名前は輪島ゆかり。ゆかりという名前は変わらない。彼は簡単に見つかった。名前は間宮えにし。やはり名前は変わらない。

さて、どこから話せばいいだろうか。前世、現世、来世を渡るのに、今の時代説明はあまりいらぬ。言ったところで無意味だ。時代から受ける影響は微々たるものであるし、彼を呪い殺すのに時代の力は必要ない。一言言えば、今のわたしからみた前世、つまりは2010年よりは先の時代ということになるだろうか。

わたしがかつて彼を殺し損ねたことに気づいたのは10歳の時のことだ。父親の転勤で引越した先の近所に彼はいた。学校は同じ。クラスは同じ。どういふわけか親同士の繋がりもあり、よくお互いの家でホームパーティーという名の親同士の飲み会が頻繁に行われる。

わたしの彼に対する第一印象は変わらなかった。言い出せばキリがないが、本心で思うことはやはり「気持ち悪い」。どう巡ってもやはり彼は変わらないし、私も変わらない。クラスでは出来るだけ彼から距離を取る。向こうから話しかけられることはあっても、自分からは絶対に話しかけない。パーティーで鉢合わせなんて最悪だ。パーティーなんて親の願望で勝手にして、子どもを巻き込まないで欲しい。親同士が仲良くしているように子ども同士も仲良くしろと言われたので、その時は形だけ仲良くすることにした。

もちろん、それではいけないことに気づいていた。相手を好きにならなければ、呪いは跳ね返ってくる。かつての二の舞だ。どうかして彼を好きになって、呪いをかけなければならぬ。嘘でなく彼を好きになり、呪いをかけなければならぬ。そこから私の闘いが始まった。

最初に、彼と一緒にいる時間を長くすることにした。自分が話題

を振る場合、どうしてもたいした話が浮かばないし、嫌みや罵声しか浮かばない。だから、彼が話しかけてきたら、出来るだけその話題に乗っかるようし、彼が次の話題を出すまでの時間稼ぎをする。自分が興味なさそうに話を聞くと話題はすぐ途絶えるので、そう見えない演技も必要だった。

思えばそれが一番きつかった。何度その場から逃れたいと思ったことか。呪いではなく、他の方法で彼を殺そうと考えたことか。しかし、そう思うたびに彼に呪いをかけ、苦しむ様を見届けるという復讐を思い出し。わたしは彼との会話を続け、そこを皮切りにハードルを1つ1つ越えていった。

今思えばどうしてあの時、他の手段をとってさっさと彼を殺そうとしなかったのか後悔している。

「間宮」えにしと出会って約8年。

高校三年の冬。

私は、彼に恋してしまった。

第七走目（二階堂文士）（後書き）

第八走目は央さんです。
お楽しみに！

第八走目（央）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！
第八走目は央さんです！

約束の時が刻々と迫ってくる。運命を変える、ただそれだけ。
——私は彼に、恋をした。

こんな熱い展開あり！？
もう最後が待ちきれない！
ご堪能あれ。

第八走目（央）

恋をしてしまった。

といえば聞こえはいいのかも。

だって「してしまった」だなんて、まるで恋することを拒んでいたみたいだから。

でも、違うよ。

恋をして——好きになって呪いを発動させて手をかけずに憎いえにし君を殺してしまう。

これが前世から続く私の悲願だ。

だから「やっと恋することができました」と喜ばいいはずなのに。おかしいよ。

私はどうしてえにし君を好きになる前に、別の方法で殺さなかったのか後悔した。

殺しさえすれば憎しみは消えるのだから、呪い殺すことにこだわらる必要なんて本当はなかった。

それにもしかしたら、呪う相手がいなければ何かが変わっていたかもしれないのに。

もちろん、えにし君を殺したあとは、私も自殺するつもりだった。だって、えにし君がいない世界で私は自分の存在価値を見出すことができそうにないから。

前世の憎しみに縛られた私なんかが生きていても仕方がないでしょう。

私は、恋をしてしまったからには一つの決断を下すことにした。

恋をしたと自覚した日に私は彼に告白した。せめて、一週間後に訪れるであろう好きな人の最期を見届けようと思ったから。

えにし君は快く承諾してくれた。

私のこと、ずっと好きだったんだって。馬鹿みたい。彼にも前世の記憶があればよかったのに。

いつかの誰かの願いのように、両想いになつてしまった。
白状するよ。

嫌悪の対象でしかなかったえにし君を好きになつた瞬間から、靄が晴れるみたいに曇りガラスが割れたみたいにまるで別人に見えた。ううん、どう表現すればいいのかな。とても魅力的になつていた、というか……そっか、あはは、笑えないよ。やめてよ。

私から憎しみ全てがすっかり消えていたんだ。
だから、えにし君が変わつたわけではないの。
認めることしかできなかった。

これが本当のえにし君。

私は告白したその日、彼の胸の中で泣いた。

えにし君は温かかった。いい匂いがした。

呪いなんかなければよかった。

前世なんかなければよかった。

溢れ出す想いに溺れてしまわぬように、私はずっと彼にしがみついていた。

一週間なんてあつという間だと思う。

けど、それが私たちに与えられた最後の猶予期間。

かつて私に監禁されたえにし君はどう思っていたのだろう。

はあっと息を吐いて両手を温める。その手をえにし君は優しく包み込んでくれた。

曇った窓の外に目をやる。雪はしばらくやみそうにない。

付き合つて三日。放課後。

告白した日から通っている喫茶店に、今日も私たちは足を運んでいた。

私の記憶をたどるとかつての私たちもここを一度だけ利用したこ

とがあるようだった。えにし君はこのチョコレートケーキをえらく気に入ってしまったようで今のところ毎日食べている。そういえば前の私も好きだったっけ。今はそんなに好きじゃないけど。ちょっと苦いんだもん。

「えにし君、今日ね……」

「ゆかり、ほつぺた」

「ん……」

えにし君は悪戯に微笑んだ。そして指先で私の頬を拭う。たぶん、何もついていないけど。

でも私はされるがままだ。ていうか、少しされたかったりする。

「クリームついてたから、つい」

「クリーム使ったケーキは頼んでないよ？」

「ああ、そうだった」そう言ってえにし君は恥ずかしそうにおでこに手を当てた。

やっぱり。

鬱陶しいなとは思っけど、でもそれ以上に好きだから許せた。

「ゆかり、ほらほら、ここ」

「……チョコレート塗りたくって何やってんのよ」

ちよつとさすがに汚えよ。可愛げがない。却下だよね。

おしぼりを投げつけると、えにし君はそれを上手に受け取った。

おじさんみたいにおしぼりで顔を拭く。

「同じことしてくれないかなって思ってたさ」

「しないよ。恥ずかしい。ていうかどうしていつもそんなことするかな」

「ゆかりは油断するとすぐに泣くから、笑ってほしいじゃん」

割と真剣な顔をしてそんなことを言う。

「私、そんなに泣いてる……？」

「ずつと、思いつめているような気がするんだけど、僕の気のせいか」

「うつん、そんなことないよ！ ほら、受験もあるしさ、えにし君

とずっと居たいしさ、だからだと思う」

胸がちくりと痛む。

「そうだよな」

えにし君はコーヒーを一口すすって、

「僕も同じ気持ち。だから、悩みがあったらすぐに言いなよ。幼馴染なんだし、恋人なんだし、僕を利用してくれていいんだよ、ゆかりは」

私はえにし君の顔が見られなくて、うつむいた。

利用して、だなんて皮肉で言ったわけではないことくらいはわかる。でも今の私には少し辛い言葉。

私もコーヒーをすすって、苦みと一緒に込み上げる気持ちを押し込んだ。

私がカップを置くのを待って、えにし君は続けた。

「僕は、絶対に大学に合格するつもり。ゆかりのためとは言わないよ。言いたいけど。まずは自分をしっかり律したいんだ。いろんなことを学んで大人になって成長して、そして必ずゆかりと一緒にこれから先、生きていきたいって思っているから」

「な、何いきなり、そんなのわかんないよ」

やめてよ、そんな未来の話。

プロポーズみたいなこと言うの？

「わかんないって!」

えにし君の真剣な声が私の耳を突く。痛いよ、やめてよ!

「だって! そんな先のことなんて……!」

——ない。

なんて言えなかった。えにし君はもうすぐ死んじやうなんて、言えなかった。

人気の少ない店内に、雪が降り積もる音が浸み込んだみたいだった。

「……ごめんね。今日はもう帰りたいよ」

私は、私は泣いていた。

ああ、よく泣くって、こういうこと。
もしも、と思う。

もしも、呪いがなければ、もっと違った涙になっていたのかなって。

駅前であにし君と別れたあと、私はバス停のベンチに腰かけていた。

えにし君は悲しそうな顔をしていたと思う。でも、一度も目を合
わせることはできなかったから、わからない。

またあした、と言われても私にはうなずき返す気力はなかった。
ロータリー交差点になっているバスの発着場に定期的に来るバス
を私はただただ見つめていた。

くるくると同じデザインのバスが私の前を通り抜けていく。

まるで私みたいだなと思う。

未来の話をされると私はダメみたい。

当たり前かも。

私はこれから、世界でいちばん幸せになってほしい人の未来を呪
いで消すからだ。

ふと、呪い師のお姉さんを思い出した。

私が今のゆかりになる前に出会った、あの人。

「過酷とか、そんなこと言っていたっけ……」

好きな人を呪い殺すなんて。好きにならないと呪いが相手にかか
らないなんて。少し考えればおかしいことくらいわかるはずなのに。
好きにならないとわからないなんて。

過酷…… そうかも。

「そうだろうっ」

「うひゃあ！」

驚いた。

驚いた驚いた驚いた。

死んじゃうかと思った。

後ろから耳元で声をかけられて私は飛び上がった。

恐る恐る振り返ると、見覚えのある呪い師のお姉さんが立っていた。

それも一瞬だった。呪い師のお姉さんの体が砂粒になるように消えたと思うと、気がつけばさっきまでのバス停ではなく、……ちょっとまって。どこですか、ここ。

私は目の前の光景に目を奪われた。

そこは。

蜂蜜色の空に、羽の生えた蛙が飛んでいた、空を斜めに切り開いたような海にピンク色の潜水艦が浮かんでいた。足元を見ると……なんですかこれ、虹色の花の中に入った小さな妖精が声をそろえて歌っている。そして、ものすごい風圧を顔に受けて目を細めると目の前をものすごいスピードで、シロナガスクジラみたいなものが通り過ぎて行った。

反転。

ぐるりと目が回ったかと思うと、一瞬で視界が蜂蜜色に包まれた。また、私は死んじゃったのだろうか。

もしかして、私の元にバスが突っ込んできたとか、それとも私からバスの元へ走っていったとか……。

「そんなに感動しないでほしい。なんて田舎者なんでしょう、そうでしょう」

「んだにやー。しっかしすっかり毒の抜けきった表情をしているにや。つまらにやいにやあ」

そして蜂蜜色の世界の中に、ぬうっと呪い師のお姉さんと猫が現れた。

呪い師のお姉さんは「うおっす」と軽快に挨拶をしてきた。

軽快というか、警戒したくなるほど変かも。

「おお、やっぱ韻を踏むのが流行っているんだ。さらりとやってのけたなこの小娘。しかも私よりハイセンスときたか……」

私が困惑していると、

「今時のJKはこういうヒップホップなノリは当たり前か？……私もまだまだだな」

駄目……。理解ができない展開すぎて、やっぱり私は死んじやつたのかもしれない。

すると、呪い師のお姉さんの隣で大きく伸びをしていた猫が、ぴよんと呪い師のお姉さんの肩へ飛び乗った。

「大丈夫だにゃー。お前は死んでいないにゃ。間抜けなオマエに少しだけおはにゃしがしたいだけだにゃ」

二人ともキャラが少しだけ、ううん、記憶が正しければ全面的に変貌している気がするのだけれど。

「キャラは変化するからキャラだにゃ。誰でも他人に合わせてキャラを変質させているではにゃいかにゃ。今回はオマエに合わせたキャラ設定というわけだにゃ。そういう役割なんだにゃ」

あれ、声に？

「ここは声もへつたくれもないにゃ。俺たちにはわかるんだにゃ。オマエの記憶とリンクしているからにゃ。おっと、理屈は聞かにゃいでほしいにゃ」

聞かないよ。そんなこと。

「……元の場所に返してください。えにし君と過ごせる時間も……あと少ししかないんですから」

できるだけ声のトーンを抑えて睨む。

今更、呪い師に用はないよ。私はえにし君のところになきゃいけないのに。謝らなきゃいけないことも残っているのに。

「ほほう。えにし君ときたかいこの小娘は、この小娘は」

「オマエに用はなくても俺たちにはあるんだにゃーこれが。うしし」とすると、呪い師のお姉さんが咳払いを一つ、

「まあ、要するにだ。試していたわけ」

「な、何をですか」

「過酷だったろう？ 酷だったろう？」

「つまりだにゃ。罪滅ぼしだにゃー。ししし」

猫はむごたらしい笑い声をあげた。

「何が言いたいんですか！ これ以上もう、私を苦しめないでよ！」
涙がこみ上げてくる。

「人を好きにならないと呪いが発動しないだなんて、普通気がつくだろう。そうだろう？」

「そんな……！ 初めからわかっていて……！」

今度こそ、もう涙をこらえきれない。

「泣くんじゃない」

と、力のこもった声が響く。呪い師のお姉さんだ。

「涙の意味を変えたいんだろう？ 人を好きになってそう願ったんだろう？ そうだろう？」

その言葉が私の胸の内を強く打った。

私は、こくりとうなずいていた。

それが心からの願いだったから。

「んじゃま耳の穴かつぼじってよく聞くんだよ」

「東宮の願いは何だったか考えればおのずとわかることなんだが、そうは言ってもだいぶ前の記憶になるからな」

呪い師のお姉さんは三角帽子を撫でつけた。

「あの時代は酷だったかもしれないが、東宮は本気で前が好きだったんだなあ。確かに権力にものを言わせた政略結婚だったかもしれない。無能な男だったかもしれない。それでも、思い出せ、よく思い出せ。本当にそれだけだったか？ お前の思い出は、それだけだったか？」

「私は……」私は……憎かったはずだ。ただ、それだけのはずだ。

「その記憶が鍵になる。まだ今を生きるえにしが呪いで死ぬまでには猶予がある。ゆかり、思い出せ」

わからない。思い出せない。

「……思い出したら、えにし君は死ななくて済むっていうの？」

「ゆかり、それはお前次第だ」

「そんな……その記憶もあなたたちは知っているの？ 知っている

んでしょう?」

「……罪滅ばし分の働きはもうしたにや」

「そうだな。時間外労働は神はしない。帰るか」

「神ってどういうことよ? 酷いよ!」

「酷くない。ここからはゆかり次第だ。前世に囚われないゆかりとして生きるための、ゆかりの物語だ」

ふわっと体が軽くなったかと思うと、視界が霞み始めた。

「行つて来い、ゆかり。運命を絶ち切れ」

「ハッピーエンディングフォーユーだにや。運命を信じるんだにや」

視界がぐにやりと歪んだ。頭、痛い。

「そうだ。言い忘れていた。お前は勘違いをしている。明日の深夜0時がタイムリミットだ」

そんな……それって、明日しか、ないじゃない……。

そこで私の意識は途絶えた。

……………

目を覚ますと朝だった。

我が家の匂いだとすぐにわかった。

「学校、行かなきゃ」

私は不思議と自分のすべきことがわかっていた。

私は、私だけの物語を歩みたい。

もちろんそばにえにし君がいる未来を。

えにし君は死なせない。

私はベッドから降りて、一步を踏み出した。

第八走目（央）（後書き）

第九走目、アンカーはミコトさんです。
お楽しみに！

アンカー（ミコト）（前書き）

朝野光のなんちゃって企画・リレー小説！

アンカーはミコトさんです。

君はいつも悩んだ。君はいつも苦しんだ。

もういいんだ、もういいんだよ。

僕の気持ちを聞いてくれ。

これで九日間にわたったリレー小説企画も終了でございます。
こんな結末を僕は望んでいたのではないのでしょうか？
お楽しみください！

アンカー（ミコト）

ねえ、僕らは将来どうなりたいかなんて考えるよりもさ。今、君の隣にいるのが僕だということに気づいてくれないかな。

たとえ未来で、君の隣にいるのが僕でなかったとしても、君の幸せを祈るよ。だから聞いて欲しいんだ。僕の告白を……。

「ちよつと、ゆかり！ 待って、なんだ急に」

僕の腕を掴んでぐいぐい屋上への階段を登っていくゆかり。僕は彼女が何か焦っていることに気づきながら、落ち着かせる手段も思いつかずにただ引つ張られていた。

「未来を変えなきゃいけないの」

「はあ!？」

「話すとすごく長くなるんだけどね、私があなたに三秒で好きにならないと死ぬ呪いをかけて、ともかくそれが一週間に伸びて、えにしくんが死ぬタイムリミットが明日なの」

「ちよつと待て。ゆかり、待ってよ。何言ってるのか全然わかんない」

言ってる内容はめちゃくちゃなのに、どうしてか彼女の目が真剣そのもので、僕は彼女の言動を馬鹿にするのを躊躇する。

「えにしくん、私が前世の記憶を完璧に思い出さないと、この呪いを消す方法がわからないのよ」

「呪いね……」

僕は呟く。

ちなみに、呪いというのは僕らの時代ではけっこう一般的に知られているものだったりする。物理は二十一世紀初期より進化して、人の想いはクォークレベルに働きかけるといえるのは常識だったし、当然離れたものにも作用するというのも定説である。ここらへんは

僕が大学に行ったときに勉強しようと思っっている範囲だから詳しくは知らないけれども。

呪いというのは負のエネルギーが空間を飛び越えて誰かの心身に作用することを昔はそう呼んだという風に現代では捉えられている。過去世も迷信ではないようだ……ぐらいには浸透してきた。ヒプノセラピーの看板は今や足つばマッサージの看板と同じくらいあちこちにある。

つまりゆかりが言っていること全部が嘘だと僕は思っていないということ。だけど残念ながら、僕はそういう分野には疎いまま育った。僕には必要ないと思っていた。

「ゆかりが僕に呪いをかけたって本当？」

「うん。前世の前世で私、えにしくんに呪い殺されたことがあるの。それを恨んで呪い殺そうと思って近づいたのがきっかけ。あ、今は好きだよ！ 大好き！ 鯖の照り焼きくらい好きだな。どうしたのえにしくん、なんで頭抱えるの？」

今ダイジェストにとんでもないこと告白したゆかりさんに僕の脳みそが追いつかない。呪殺って今は法律で禁止されてるんだぞ？ 知らないわけじゃあないだろうに。

つまり、僕を殺すために近づき、僕を殺すために告白し、僕は何も知らずにそれに喜び、そして殺されるとも知らずに彼女を愛したということもよくわかった。わかったけれどもさ……。

「正直、シヨックもあるけどさ」

僕は冷静な自分に戻ってきて、ゆかりに一言こう言った。

「だからどうしたの？ って感じかな」

ゆかりが「え？」という顔で固まる。

「呪いを解かないと明日までには死んじゃうってのはわかった。だけどそれがどうかしたの？ 明日死ぬかもしれないのは、たとえば車に轢かれるかもしれないし、いきなり流玉に当たるかもしれないなんてことがゆかりにも、他の誰にでも起こり得ることなのに、僕だけ明日死ぬって分かったら、特別ななの？」

「特別だよ。だって、避けられるかもしれないのに」

「避ける方法を探して最期の一日を過ごすなんてそんなムダな一日の過ごし方はしたくない」

ぴしゃつと言つてのける僕に、じゃあどうすればいいのだとゆかりが唇を噛んだ。

「学校サボろう。二人でどつか遠くまで行かないか？ 人気のないところがいいな。なんて言ったら下心あるのバレる？」

僕の提案に、ゆかりは首を横にふるふると振った。

「馬鹿。えにしくんの馬鹿。私本気で心配してるのに」

「ねえゆかり……僕、死ぬのは怖いよ？ 輪廻があるのが常識になったって言つても、僕が僕のまま転生するわけじゃあないからね。記憶もなければ肉体も違う。ゆかりだってそうだろ？ 前世の記憶があるってことは、また僕に会えるかもしれないことを知っていたって……今の僕を大切にしてくれている」

そう、もし今日が最期の日ならば、僕は伝えなければいけない。

「僕は、ゆかりがずっと笑ってないのを知ってるよ。ゆかりがどうやったら笑ってくれるかずっと考えてるのに、ずっと苦しそうな目をしているのを知ってる。来世で会うときもその目をしてるのかな？ そっちのほうが、僕は死ぬことよりも悲しいんだ」

会ったたび、会ったたび、彼女は自分の過去の記憶を引きずって笑えず、僕の言葉も届かず、そして自分の人生を大切にできず、僕に報復するために生きているのだとしたら、そんな絶望的なことはない。「最期の日さ、思いっきり笑おうよ」

有意義なことに一日使うよりも、馬鹿馬鹿しいことに一日使ったっていいんじゃない？ 愚かだとか傀儡だとか言われても、僕は人の価値観なんて大切じゃあない。大切なのは、君が笑ってくれること。

「さあ、三秒で僕を愛さないと死んじゃう呪いをかけたよ？ 君は

どうする？」

これは僕のほんの冗談のつもりだったんだ。愛してくれない君が、せめて笑ってくれないかなって。

ところが君はその言葉に凍りつき、そして持病の心臓発作を起こした。

この僕の愚かな失態をどうすればいい？ 君にどうやって謝ればいい？

君が許してくれるまで、君の近くに生まれるよ。君が再び笑ってくれるまで、僕は君のためのピエロでい続けるよ。

馬鹿だと笑って？ 愛しいゆかり。

「鯖は味噌煮が好きだけど、照り焼きも悪くないと思うようになったのはゆかりと会ったときなんだよね」

思い切り笑えると評判の映画を見終わったあと、僕らは手をつなぎながら歩いた。

「ゆかり、覚えてる？ 小学四年生のときに給食で鯖が出たこと」

「え？ 覚えてない」

「クラスメイトの立川が鯖苦手で床に捨てたのを先生が怒っただろ。そのとき『この鯖の切り身は生きてるんだ！』って僕が言い張って、そしてゆかりも『活きがいい鯖の照り焼きだ！』って言って、二人で庇っただろ。先生はもう呆れちゃってさ、クラスでも笑い者になったけれども、僕らあの頃から全然変わっちゃいないよね。僕は馬鹿そのものだけど、ゆかりはずっと僕の馬鹿に合わせてくれてるっていうかさ……」

「そんなことないよ。えにしくんの発想面白いと思う」

「ということで、今日は鯖をつかまえに行こうと思う」

「鯖を……？」

「僕たち鯖の切り身は見たことあるけど、鯖って見たことないよね。海まで行こう」

「ええー」

「そしてその鯖を照り焼き、味噌煮、塩焼き、ソテー、唐揚げ、あらゆる料理法でどれが一番か決めるんだ」

「一日で終わらないよ、そんなの」

「じゃあ明日も続きをやるう」

「でもえにしくん、明日は……」

ゆかりが言い淀んだところで、僕は振り返る。につこり笑って。

「想像してみて。僕が君の鯖の照り焼きを食べて、超笑顔で『おいしい！』って言うところ。毎日笑顔で、君の隣で馬鹿なことを言ってる僕を。君は僕のことを『馬鹿だな』って思いながら笑っているところを」

ゆかりの答えを、表情を待たずに僕は彼女の手を引っ張り、走り出す。

「あ、ちょー！」

「僕は、輪島ゆかりさんが世界一大好きです！」

人通りもけっこある街中で大声で僕はそう叫んだ。周囲の人が振り返る。ゆかりはちよつと恥ずかしそうに「えにしくん！」と言った。

小声で「ばか、」と呟き、俯きかすかに笑ってくれたのを見て、僕のテンションは跳ね上がった。

そこから先は覚えていない。僕らはその日一日楽しんだ。鯖をつかまえに行くという名目で海まで行き、帰りは海に見える民宿に泊り、翌日は両親と学校の先生に怒られ、そしていつものように毎日が続いた。

ゆかりは次第と笑うようになった。

君が僕を理解するのに八年（と、僕は思っている。前世を知らないから）かけてくれた。僕は君を笑わせるのに一生を使おうと思ってる。

君はどうしたら笑うの？ どうやったら喜ぶの？ いつもそんなことを考えている僕を馬鹿だと君は言うだろうか。

「三秒で愛してるって言わなきゃどっちかが死んじゃうおまじないかけた。どうする？」

僕のこんなブラックジョークにも、今の彼女は笑って「はいはい、愛してるよ」と言ってくれる。

そうだよ。僕は、君の笑顔が好きなんだ。

——ねえ、笑って？ ゆかり。

(了)

アンカー（ミコト）（後書き）

最後まで読んでくれた方、本当にありがとうございました。

こんな未熟で頼りない僕の、自己満にしかすぎない企画に参加していただいた執筆陣の方々にも、最高の感謝をしたいと思います。

僕朝野は、すごく貴重な経験ができてすんげえハッピーです！

実は『朝野光のなんちゃって企画』第二段も考えていたりして……

これにてリレー小説企画を終了します。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770w/>

【朝野光のなんちゃって企画・リレー小説】お題『絶望と笑い』

2011年9月22日03時24分発行